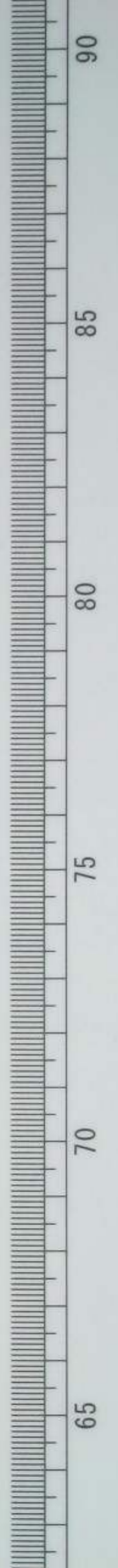
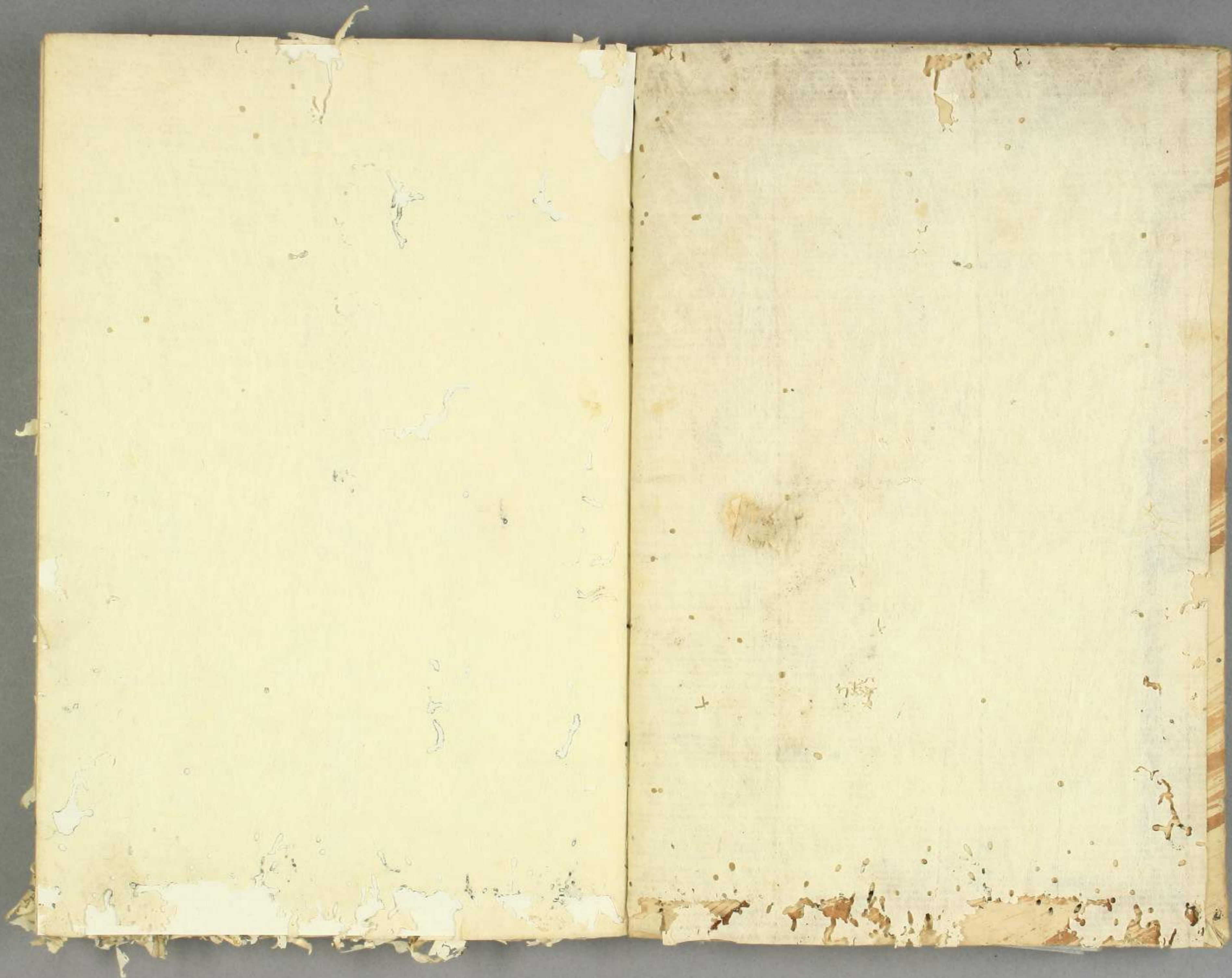


特別
ハ 3
2724
1





門 八 3
號 2724
卷 1

白雲山源流

中一境集公派

兩宮按内記

勢陽講古堂壽梓



邦同伊地此國ハ常世の海乃産海ノ事
 珍國たつし國たつしヨリありん事と天地あつちとらたに
 まりまのあひく事あひくのほらん地あつち也
 して下津あつち岩根ノ宮柱あつちをたて高天
 原あつちに千本高知あつちと 内外あつちの邦あつちはけり
 ちつまろを給ふ事あり我國第一の宗廟あつち
 小海あつちもあつちをよ一人より下万民あつちよつち

安中亭

まてあつたならなむらむらむらむら
 聖乃清代の清いはくさぬむらむらむら
 天う下平ふして梓弓のむらむらむらむら
 りるし鞆乃喜耳のむらむらむらむら
 財るし風順ふして其大系ハ 大神の
 清慮はむらむらむらむらむらむらむら
 じらむらむらむらむらむらむらむらむら

めじく鴨はく清く猿まへじ後
 色くふ清くぬらむらむらむらむら
 遠海園より清くさ道のむらむらむら
 く宮居神籬のむらむらむらむら
 らむらむらむらむらむらむらむらむら
 すくさむらむらむらむらむらむらむら
 めむらむらむらむらむらむらむらむら
 安内上

原の松が村の陰のふじ書け梅の徑
わら事乃久きまねと物知り人の
むつひと神垣れるるふふ海見とま
事さるるふふふふふふふふふふふ
川を經 兩宮ふふふふふふふふふ
たの宮社らけくの舊海見の浦
く

ふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふ
伊那米宮按は記と號ぬふの書と
ふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふ

441

たゞ伊勢の演説に巧みなるまうと推の
求りて書あつちりて非境の二ありた
るるを以て解く事くもふものには

寶永四年之仲秋

講古堂主人謹書

伊勢參宮按内記卷上

齋宮

齋宮

左右をさうさうといふなり
多氣郡奇志村
大石の左乃方に在

人皇十代崇神天皇以前神代の清神勅は
皇大神と天皇と沖同殿かましくらに此天皇

よりて漸く非威と思ひこころせしむる
豊鋤入姫命は大神の清靈とありはるる大和國

磐瀧邑は鎮めしむるしむるに内裏の
移してあつて鎮めしむるは侍所と申

神代卷一
其後皇仁天皇女倭姫命禰らりて
皇太神と齋宮とありし所を求む
所くと經つるに終つて倭姫命度命部五十能川上
に移りてありたり今乃内宮をたらし其
齋宮と又十能川上たづなひの邊に造りて住む
是と後世に傳へし也倭姫命延年老給よと
景行天皇乃皇女五百野皇女と傳へしと
け時始と齋宮と多氣郡とありて五百能川
と居りて終つ今乃齋宮といはせ也

神代卷一
天照神即此の齋宮とありし所を
皇女を下宮とて倭姫命奉幣使とて
告給ひし所とありて終つ今乃齋宮といはせ也
て九月よりして天照神の御指とて
倭姫命の御指とて申とあり
それより齋宮といはせ也
内宮外宮は神代ありありて神事と勤め行ひま
なり三節家といひ六月十六日ハ外宮月次祭
十七日ハ内宮月次祭九月十六日ハ外宮神嘗祭

十七日、内宮神嘗祭、十二月十六日、外宮月次祭
 十七日、内宮月次祭也、是を俗に三祭禮といふ也
 後醍醐天皇、ふりて天下兵亂よとて、ひそかに
 皇女祥子内親王より、ひは内宮御移行、後より、
 との齋宮村乃大道のふもと松原生霊にて、しむの
 森のこき母の齋宮の齋宮の儀よとて、ひそかに
 甚傷り也、此の事、いふ齋宮の事、いふは、ひそかに
 して齋宮をいふ、いふは、いふは、いふは、いふは、
 乃齋宮といふ、いふは、いふは、いふは、いふは、

△離宮院

度會郡小俣

二町南のあり、
 け院ハ大神宮の清厨齋内親王、離宮諸司此宮
 舎乃建ぬべふとふ、いふは、いふは、いふは、
 天皇の清宮ふ有、鳥墓村ハ神庫と造りて、離宮
 神宮を執りいたす、いふは、孝徳天皇の清宮ハ、
 御言、いふは、清厨を建て、神庫ハ、號を改て、清厨
 とて、大神官月とて、神宮ハ、芳々、度會、氣、
 神三郡と稱して、大神宮の馬領あり、いふは、神宮
 を離宮院ハ、御言、いふは、大神宮月とて、神宮ハ、

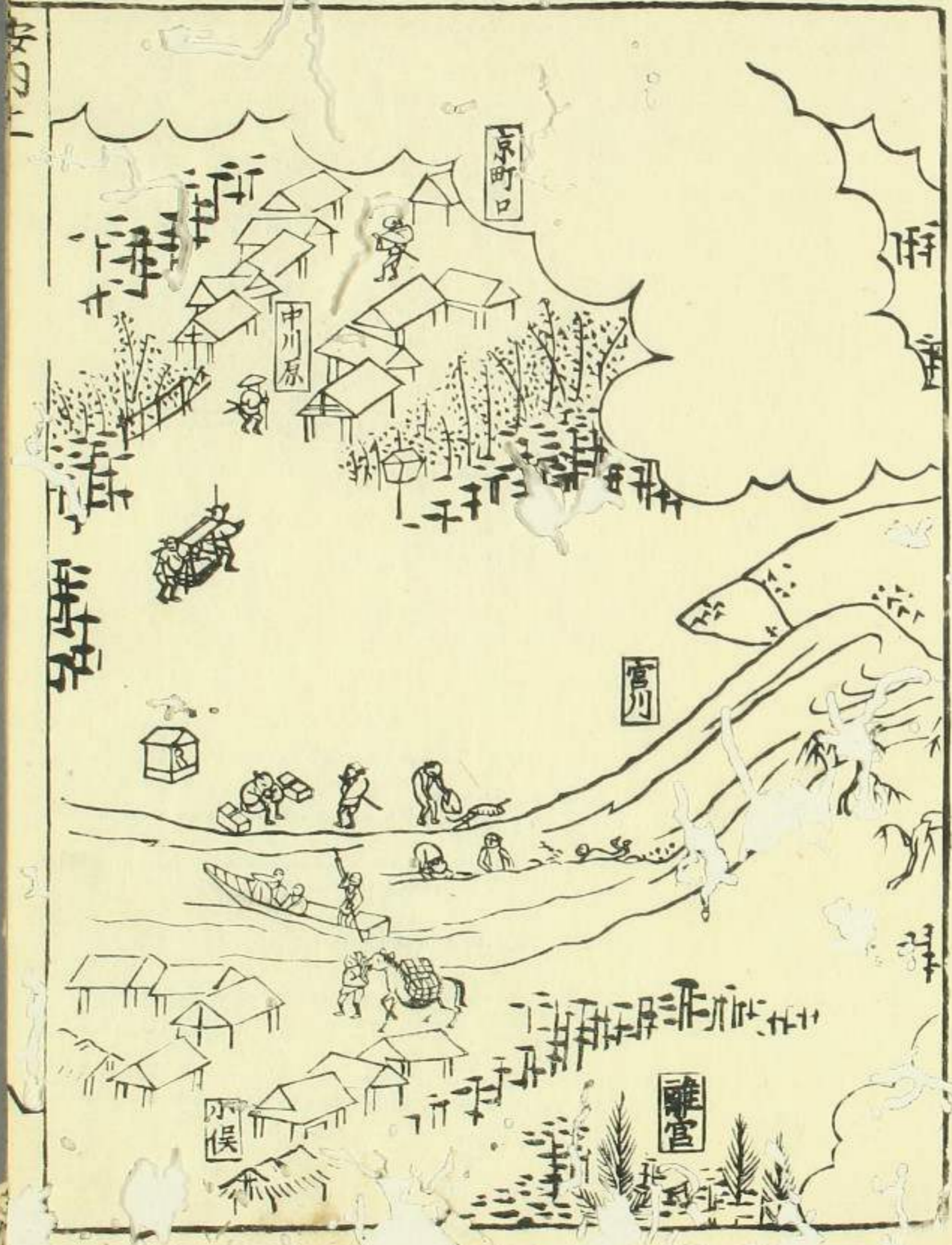
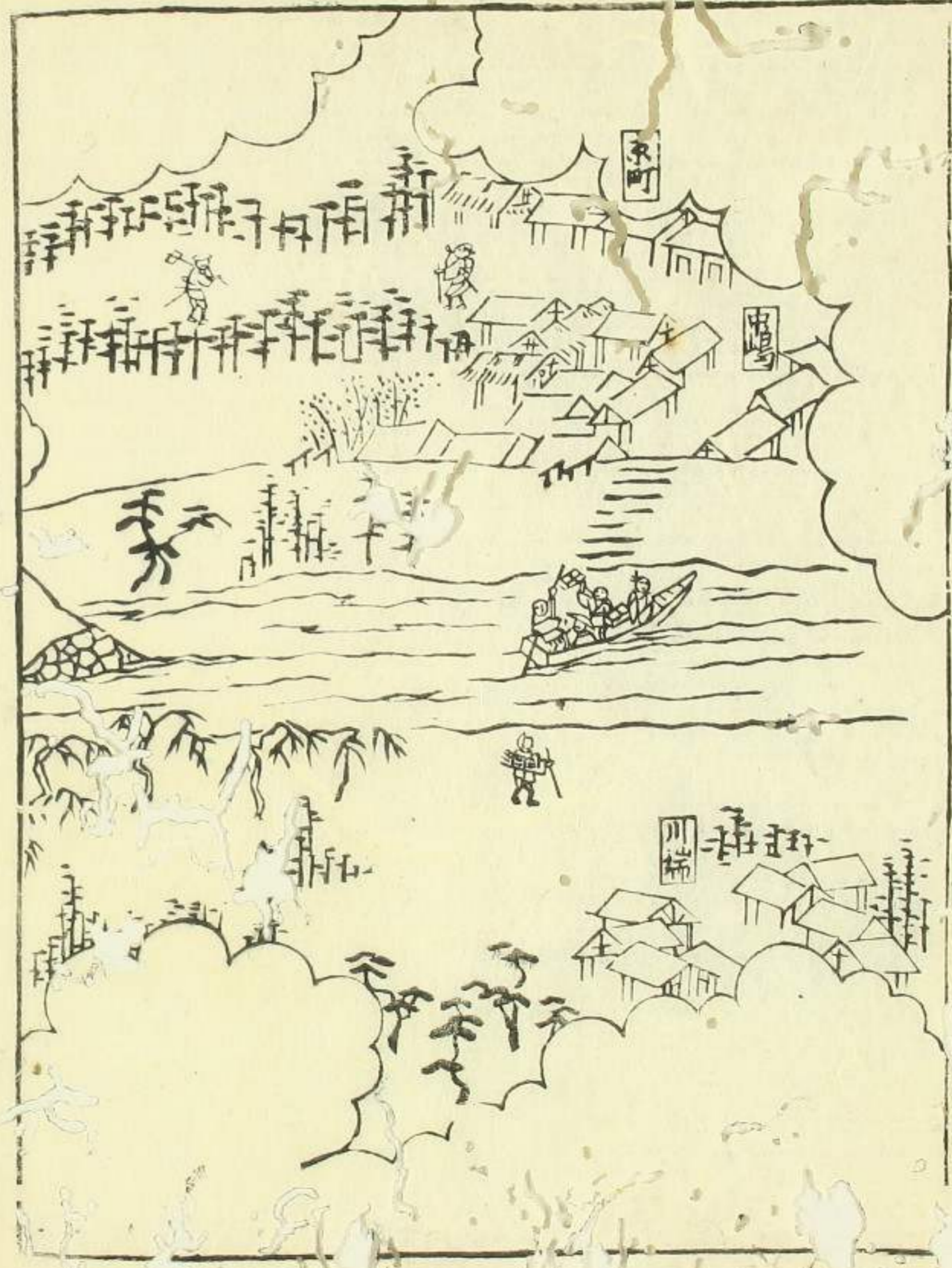
彦ノ元行りまうとくや其後高河原の離宮は法水
 ノ系ありとて延暦十六年に宇田西村に移され
 るり宇田西村今乃小俣村より舊の院内より爾其
 離宮は自ら宿舎ありとて三つの禮は爾内
 王勅幣使に院よりなりたすといふその由も乃
 勅幣を勅りまうといふもや今之後は縁の内
 右の苑垣乃跡亦くにはおまがりし所の方に春日の
 といひ傳へしはわり中臣乃氏けしとて出の御
 これも後よりと實之年中に大文司精長由臣舊

跡を思はせそ氏社を母與一造り

外宮

△官川 山田乃入口より是より海
 豊受大神乃漸敷地の川よりゆへ
 又度會川ともいふなり和歌よる大川ゆき
 爾乃三河川ともいふなり勅使御祭向の所
 下郡に川系にわき河を修り大庭を敷く保
 後河の系よりけ川は浴とて身とほむといふ
 子なすくふあり地人も服織乃みかると
 け川はわき沐浴身とほむる例なり

橋内



橋内

橋内

新古今集

新古今集

新古今集

新古今集

新古今集

新古今集

新古今集

新古今集

新古今集

新古今集

新古今集

穂海人とのひし海人ありて幸をとりかると

元として今にあらむ認め行ひをまら又この船

後一考を神領より支配しまら申比より他

領より属しるるを^宝年中よ儀よ^新ひて舊

の別ちまら^同る^法也^も滞^るも^たく^後一^まら

兼^まら^人よ^難澁^なら^しめ^んる^まら

△中川原 川系乃る六町ありの下の町

け町乃る入^な常^夜燈^{あり}暗^敷も^あれ^を目

あてあうて歩まざるの事ありてはつらなるに
けつらり町の中りたる方に井の松ありて
人家は連まらばありて是と京町とありて
のなるより勅使上使及び大名の家乃降参り
け道を歴てよふらり中川系を徑て通りて境世
ちよ入る宇良口とありて道乃終の近き人皆
京町をを歴てより又小俣口より後まで中橋
久留二俣の内へ入る事ありてありて京町
より往るは後とありて行程八道ありて

△堤世古 中川系乃次の町なり

兼店ありてありて直に往て山田乃道

よむらふとあり

△大同廣 上中郷乃

境世古の入口たる方の横道より往りけるあり
る柳の林ありてあり

△大開國生社二座 大百廣乃在の

大若子命

乙若子命

外宮

外宮枵社十六座乃内也二社同一玉座の内
座と東へ大間社西へ國生社なり昔より大
神鎮座乃河の供奉社なりて大忠功あり
りか社なり度會氏の祖神なり

△草名伎社一座

同森西の
方ありあり

標劍仗

卯之枵社十六座乃内なり皇仁天皇の御宇に
裁乃の朝敵阿彦進付の時大着子命に賜
ひ清きるる乃劍をまわし社なり日本武尊

乃古事に擬へて草名伎社とやうなるなり

△清野井庭社一座

大間社一町許
乃方人家の裏に在

草野姫命

外宮攝社十六座乃内なり俗に是と小間社
と大間との名を對してふるる一甚傳り也

△中嶋

境のさへ京町の
入の町あり

よよの田丸口乃後よりいふ所なりた乃
方に接るあり京町といふ中り京より中嶋
よりか乃道なり

安

中野

△中野 中野乃次
の町なり

△辻 中野乃次
の町なり

右乃方に小川町よりいふ道のあり

△二俣 二俣乃次
の町なり

△字良 二俣乃次
の町なり

東の本戸隠れたの方に道ありよよの境世より
アとけ所よおとく上中之郷に到るなり

△上中之郷 字良の
次乃町也

町の橋あり筋向橋といふ斜に架せり故也

△下中之郷 上中之郷の
次乃町なり

△八日市場 下中之郷の
次乃町なり

△一志 八日市場乃
次乃町なり

△官後 一志の次
の町なり

右右のよとをりて町あり是とて官後といふ外官
の後にありし町ゆへに官後といふなりけ町の右乃
横より館乃町北御門といふなり

△月讀宮二座 官後北乃端
乃森に在

月夜見命

三

三

掛

荒魂命

外宮第三の別宮より舊の月讀社と言せしと承元四年に子細ありと社號を改めと宮號と宣下し給へり

△高河原社一座 月讀宮地の内 東乃ちあり

月夜見命御慮

外宮持社一六座の内あり

△館 一志宮後田中前 西四町は属す

館との昔に推祢宜内人乃齋館ありしゆに乃

名あり今の人家なるはて齋館のありしはもと齋號のすくふ館といふなり今月夜見命御慮乃人を住せしむと祢事のわらうの祢宮にありし齋宮なるは町の中れに在る横道を歴て外宮の入口北御門はあり凡そまじ道は北御門の一多居との二道ありし身居より齋宮なるは式とてせしむは勅使上使共の一多居あり齋宮入ありしなり北御門を町方より乃初程近くて住しむは多居の北御門あり

按内上

赤松傍とらりなり

△豊川 官城の西北よ
廻ま川をま

豊受大神の所ま池は属まふゆま豊川
とつふちり

△北御門橋 豊川よ架
びり橋あり

豊川橋とまふちりけ橋乃おにりく下系とら
なり弓箭槍長刀等の兵具佛舍利佛経念珠
等乃佛具を帯し入事を禁とらり是併
まらるる事をぬいまふゆへにあひなりけりま

中よ入るる邊り又痰唾を吐ありまむに物候
なりとら事を禁とらるる餘り不教らるる心と
住て候しむしら秘乃社を一ま宮とらふ系傍
乃第一の宮あり又小宮とらふ御本宮と大
宮とやまに對してつらるる一ま其ま卑倍の言
あひにけりて中後ある事あり

△丸神 小官の東
の傍ま在

豊川乃糸のほまより御宮乃内のんまありて
あまのよんまらるるを蔽りんまは佛を以て

結ゆいせつ乃の死しきしをを俗よにに櫛しととなり

△北御門社一座 小宮乃 西よ左

若雷命

加茂社かものと同社のははゆゆききにに一社一二名二なり然れもも
崇ありまるるふふ心こををかりまりる名な多たるる河かはは社しなりと
加茂下上かものと念ねんくく加茂社かもの乃の所しよ神かみ速はやをを拜をととり
あり僻事ひさなりと又またいい地ちの人ひと様さまののおおりの首くび途みち
ととくくいい社しはは祭まつり拜をとといい越こええととをを知しるる人ひと稀まれなりい
るるととおおりのありまるるととや

△國見社一座 北御門社乃前様 路よ入く太の方よ左

彦國見加伎建與束命

外官攝社十六座乃内より

△祢宜宿館 北鳥居の前左乃 横路乃末より

十と奠か乃の祢ね宜い齋さい戒かい系けい宿しゆく志しととふふ乃の所しよなり又天下てんか
國家こくがのの所しよ祈いのち禱たごををももいい館たてめめとと執とりつりつありなり
齋さい屋いとともも齋さい館たてとともも神かみ館たてとともも宿しゆく館たてとともも祢ね
束た社しはは准のりととふふととくく若わ路ろよよりりままるるとと宿しゆく館たてとと植う
乃の例れいなり

後内膳

△北鳥居 子良の館
乃新よし

けるる名を借よ北鳥居とてしむるに
いさなり凡番まじりていさる居より入
よとゆふよ人皆北清にり茶入
よ一二鳥居の准しとゆふも
北の宮に鳥居より
いも非と記録まらく
茶にりて假よ北鳥居と稱する

△子良館 北の鳥居の
たれまよ

子良并よ物忌父の宿館あり子良とハ初
御饗を供進る童女さつり延喜式
記せり是なる古る大物忌御饗
物忌とて書女教ありゆふよ子等と稱
こと父を物忌と稱し子等と書小御饗
備へまらふるり今の世の子一人にて
の人らよと稱しりて子等後を勅め
たり子等よと書と書らの子は後
入時

神代卷

△清涼殿御白殿子良館乃南より

朝夕乃清涼を炊きまふ所なり然るに夕暮り候
火くま炊きまふゆへ忌火屋敷とてヤリとまき
一殿の内をまきまはりて西のつらさを清涼殿むつひ
東の向を清涼殿とまきまはり凡神膳ハ黒米を炊
きまき思積みの水と二見濱の焼塩と成り候へ
て供進ふまはり候餘計くは神事ふまはりて供
進ふ乃神供あるとてや深秘の事知れり天下
第一の宗廟は神代とせしむるに珍羨せし

きあめをまきまはり候餘計くは神事ふまはりて供
進ふ乃神供あるとてや深秘の事知れり天下
第一の宗廟は神代とせしむるに珍羨せし

△木柴垣神代殿の南東道のちり

け清涼殿に附く朝廷を遠拜しなまらぬゆへ朝廷
遠拜所とていつひ又神事毎又神官乃列を整へ
らるゆへ又列所とていつひ又列所とていつひ

△廳舎子良館乃西南より

神官物忌父等此舎に集りて種々の神事候ひ
給ふ所乃舎なり又神官に衆後裁判しる事あり

安内止

廳裁とのい神領那縣羽官職掌へハ知一
下文を廳室とのいけ舎よ著く室のいさ
ゆへるへ

△御酒殿 子良館と廳
舎よのるよを

清酒を納めをらるく殿より清殿内ハ豊宇賀能實
命を祠とをまらる

△御調倉 廳舎乃
西より在

所より献する清酒物を納めをまらる清倉より
又清改印を納めをらるゆへは清改印清倉の

やととをらる清倉乃内ハ宇賀能美多麻神を祠と
をまらる

△御器倉 御調倉の
南より在

初々乃清饌ハ用系乃土器并ハ年中法祭ハ用
のよをを宇爾郷より酒進する代納めをの清倉
たりちと此等の清倉ハハ清鑑清倉懸稅御
倉鋪設清倉たといハ清倉ありし事後式帳ハ
載より今ハ絶えたり

△上御井社一座 清炊殿より百廿二
西藤原山乃麓より在

と載り古紀を按ると今乃御厩内の御厩
乃所より儀式帳の御厩一間馬集厩二間
御馬隠厩一間と載り今乃御厩内の御厩
幸に御厩御馬一疋存りを外宮より内宮
櫛飼に唯へて本馬を居置りたり
是より直に洗馬場より居置りたる居より入
来りたる本道と一ツよなる也

△服紀道の端より入

本道乃東の小徑なり服紀乃軍へは道を歴る

外院より遙拜よりはたりるまゆへ服紀道と
よりより僧尼山伏法師の軍もは道を歴るなり
御西敷をまきけて本道を避りしりなり

△一鳥居 御宮の北道第一の鳥居をいふ

上に云ふ後より館より東より向く住あり
南より折て橋を渡りたる居にありたり是より
兵仗佛具を奉りて北御門よりおれり
勅使上使も宮に入りて下参り兵仗を解り入
たまりたり

神庫

神庫 一の鳥居と二の鳥居との
間の秦道乃右あり

初家祚宮の神記録より歎書儒者等ふるふるに
納りてより乃庫苑たり他方より奉納さるる事
務をとも祚庫に納らるるなり儀ある校勘の爲に
祚庫は副々文殿のありとて火災を憚りて
今も神庫を避く宿館は附く建らるるはと文
殿といふなり

△二鳥居 一の鳥居乃
次は左

勅使清泰勅の時け所めりて大森神壇を執りて

から排乃枝よ本綿を結ひ垂く振拂ひ懸壇と
云ふは蓋て排乃葉よ裁て振漉いて清めたる
るり法水の秦官人を清師の家にて清め乃
祓と裁りてしむるとけんとおよぶるなり

△五丈殿 秦道乃左のあり
九丈殿のやうなり

儀式帳は五丈殿二間と裁一具一間ふりて是に
一の殿とをとり今一間の五丈殿をけ殿
の向ひ南に立ち主神司殿とを東とてうや
久く絶るなりと元禄年中に今の五丈殿一

神庫

神庫

間を公儀より清再興へ給へり殿の事
中神事を執行りて事度より勅使清系
向乃時を此殿に之饗應を進めらる也

△九丈殿 五丈殿の南より

人皆此殿を一殿とす誤なり一殿主神司
殿九丈殿三字を總て直會院と稱する也昔
清の清道より檢校算成よりや此殿の南西に御興
室ありまると古記に見えり

△玉串所 九丈殿の南の庭を云

月次神嘗祭の此所に之官司祢宜玉串と
たまふゆへに玉串行事所といふ又け所より
一本乃楸玉串を一木楸といふ此楸の下あり
官司玉串を取て楸乃東を廻りて祢宜玉串
を取て楸乃西を廻りたまふゆへに廻楸と
いふなり又解齋の内勅使官司祢宜乃冠は
たまふ木綿髪曼を云々此楸の枝に掛ふなり
故あり楸なる人これに神拜乃時楸を過
に行拜乃むいもありまるとや又此名

中重

中重まうくを三のよらうらて内院中院外院

やのよけきりき外院なり又場不大き小廣く

して事乃行りあ所さるあまを此所を

場ともいふ也

△四所遥拜所 廻廊と佛池

東西一行又置石ありけ置石よ就て別宮と遥

拜しきりゆへ遥拜所といふなり

△三石 佛池乃

佛池乃あよるを鼎乃是の如くふまの居

三石といふ月次神嘗祭又遷宮の時佛平に

け三石又著き佛襖を修せりなり審文の

付け三石を避て踏らるれおのり

△佛池 洗石所

佛池乃為よ深き池あなりた水より

るゆへ下の佛井此流まじりて佛池に流る

るじあさり池水一流なる故上中下とこり

見るとあまのよらうらなる上佛池の西の

佛殿の前よるをいの中佛池といふ今乃洗石也

中重

三三

下の湯池といふこの名居乃南にあるといふなり

△僧尼拜所 三の鳥居の麓流水乃
傍に正殿あり

手水所乃右の方の石を約して小橋を渡り拜所
より別子なる僧尼山伏法林乃人け所より拜
しを經るなり

△伊弉諾伊弉册尊拜所 手水所乃北
の石壇あり

け所より伊弉諾伊弉册尊又をまき方に座を
傍社を遠拜と我方をける壇を世俗は伊弉諾
伊弉册尊乃拜所といひて傳へて今ハ此の

名とまらるなり

手水所乃小板勢ひを構へて俗は清母の拜
所といふ大神の清母祓乃拜所といふ略なる
る石壇ありて伊弉册尊を拜するゆゑなり
便つとて記やうありて拜所と構へて伝ふなり

泰官人乃拜可むらり

△三鳥居 第四階
乃南あり

三の鳥居といふ俗林なり古記ハ荒垣清門
といふ板垣清門といふ江家次第ハ神事記

よきをこの居といひ第一の居より第三
に當まらゆへなるをし古はけ鳥居は板垣あり
つて四面の居もありとあり

△第四御門 三鳥居の
ありあり

俗は十二所乃清門といひ柱数十二本あり
なり古記は是を外の玉垣清門といひなり
け清門は玉垣ありと東西北は小門なりと也

△小鳥居 石壺の
側あり

小鳥居といふは俗にさう古記は守清門といふ

つと内宮なる居をぬく例をこの居か

△石壺 小鳥居の
左右あり

小鳥居の東乃腋あり勅使を日乃壺なり
西乃傍ありと祓官十負の壺なり延喜式儀
式帳より版位と石壺ともいふ

△齋王候殿 王申清門の
東のありあり

古も玉串清門乃前東は齋王候殿西は舞姫
候殿ありと祭禮毎小齋内親王齋王候殿は清
著座りして玉串を取らむと齋宮乃女孺舞

姫候殿又候一と舞を奏せしとや又殿と云ふ
 絶く久く無つと云祿年中よ公儀と云り
 爾王候殿を再再真ありしかり祭禮乃時雨
 日さしを勅使官司宣令祝詞をけ殿にて
 なりたまふ乃例なり

△玉串御門 小室の居の
内より在

玉串御門といふ俗稱なり法然又官司祿宣
 乃持るふ玉串を物忌父等取くけ御門の柱
 下よ細糸いへ玉串御門といふ也古記よりいへ

垣御門といつりけ御門に附く玉垣も久く絶
 たりと實文乃御遷宮の時御再興と云也
 法然乃奉官人といけ御門の前より拜しを
 らるりたり

△蕃垣御門 玉串御門を瑞垣
御門といふなり在

俗よ猿頭の御門といふなり

△瑞垣御門 蕃垣御門
乃内あり

瑞垣け御門に附くゆへは瑞垣御門といふ又内院
 御門といふなり

△五殿

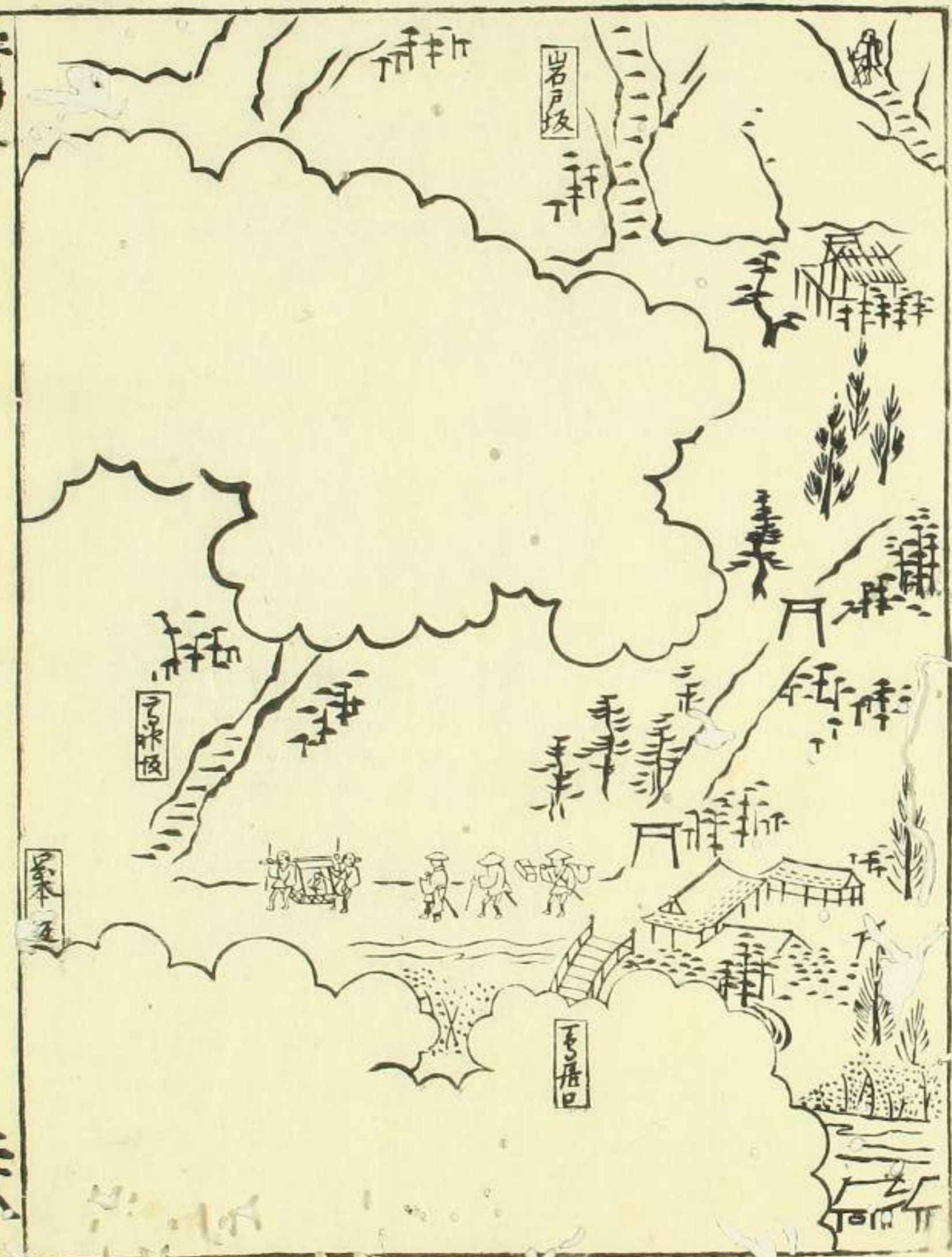
神四座

五神四座の秘傳有

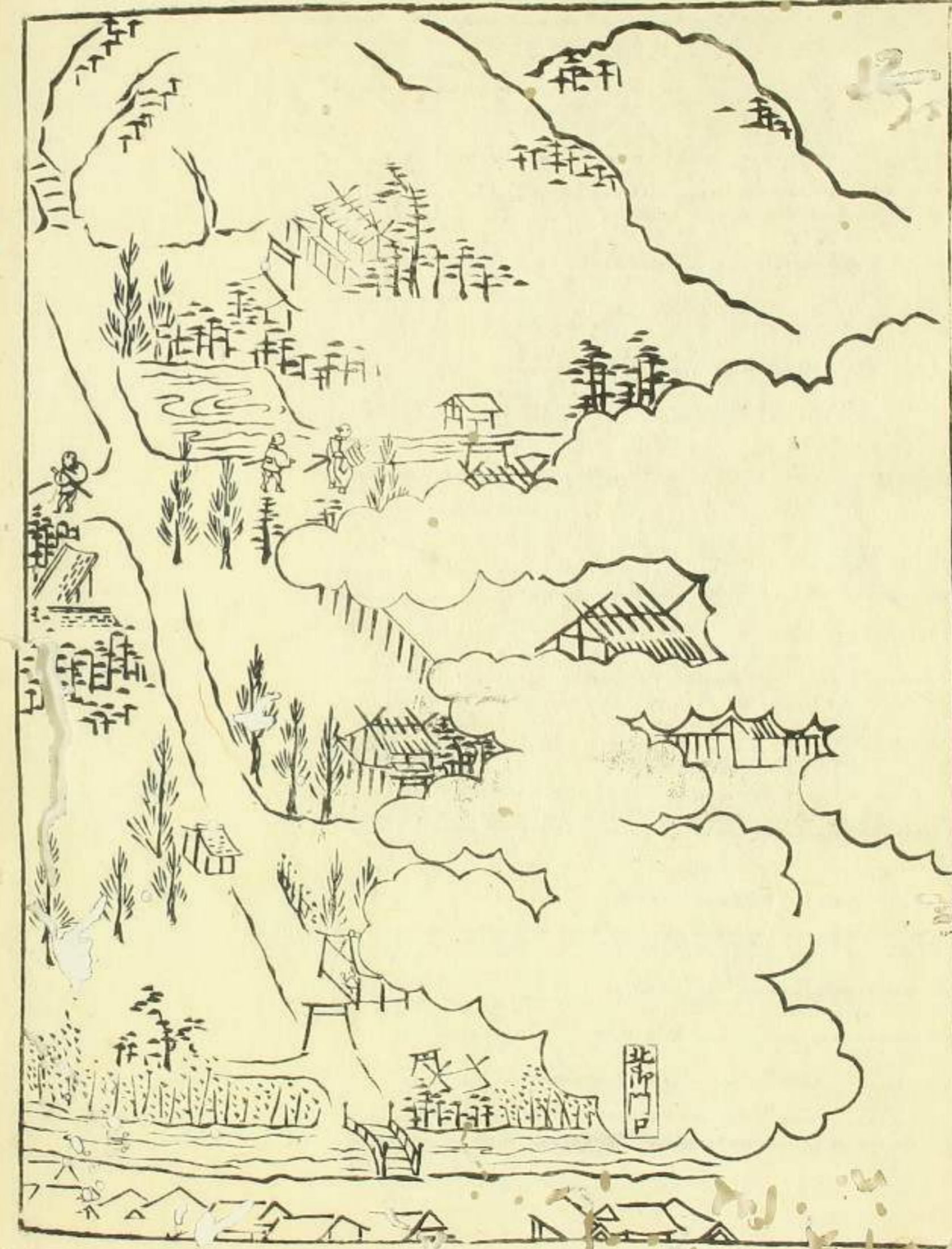
豐受皇大神

當宮を外宮とて豐受宮とて度會宮也と
 申しまほす也日本紀は渡遇宮と記さまほす
 内宮乃清事たり是の外宮清事なるは此に號
 たり凡内外の清宮は倭姫命日少宮を撰
 造らばとまほすと倭姫命世記大田命傳記も載
 らまほす人為よお事よあまらまほすやこれ
 公尊乃御下に心御柱を齋い給りまほす

忌柱とて天御柱とて天孫柱とて申しまほす
 一氣乃起ると天地乃形陰陽の原萬物乃躰也と
 寶基本紀も見まほす是即ち本宮神道の大宗
 本けきを識得とて神道乃總事とて此を後
 者乃ゆはせらまほす御形株樺千木鯉木等の
 事と世の解釋もまほす此のよあまらまほす
 外を撰らるは内外の表徳との見まほすと片撰
 乃千本の内外まほす此のよあまらまほす
 恒て一彌宣度會朝棟神乃秘したまほす二宮



外宮



一、この所もまた清徳を志せらるるの事なりし御
鎮座ありし事、倭姫命天照大神を戴きたる
つとく清宮所を求めて丹波乃與謝宮に移るとは
しまに時豊受大神天降るともいひて清一所
にまゝくまらふ天照大神皇孫をまつて豊受
大神を奉仕せり是こまゝして今の内宮の清鏡
座ありともいひくはし時皇に天皇二十六年あり
其後四百八十二年を経て天照大神豊受大
神と一所より移りて清宮と名づく事と

一、ゆきぬとの清神託もく推略、天皇二十二
年に與謝宮より豊受大神を今の外宮に
移し鎮めたりと云ふ其時天照大神吾祭奉
仕と云ふ先豊受大神を祭りて其後我宮
乃祭りを勤め仕ふまはるる一と清託宮あり
くつゆへに諸祭皆外宮を先にまつる也
相殿神

東 天津彦彦火瓊瓊杵尊
天兒屋命

安上

三二

太玉命

相殿申し事神同殿に相併せ祠とす
まゝ乃名にしく實ハ大神を相もて仕へ神
坐しこまゝの心まゝくくしむる皇孫等と天
兒屋命太玉命との三座乃神玉座の神前
分も神坐とともや天兒屋命太玉命をえめ
内宮乃相殿に神坐せしと皇孫尊當宮の相殿
に神座とに固く陪從しまゝしめらるる此宮
に移し祠とすもか足即ち天照大神の神託宣

に依りたるの固し甚深秘傳の裡りありし事なり

△東寶殿 瑞垣乃内正殿
の前東に在

△西寶殿 同上西
に在

東寶殿に神幣乃錦綾神襦の糸等を納め

西寶殿に神神馬の鞍個等等を納め

神寶藏あり

△幣帛殿 正殿乃乾
の方より在

内乃外幣の外に在り外幣殿とす

神寶幣物等を納むる神藏あり

△香御門 正殿乃 後乃在

西殿乃北よりあり清門ゆへ右記より多く北乃清門といへり瑞垣玉垣乃裏清門二間あり

△御饌殿 正殿乃良の方内 西殿の外乃在

二所大神は朝夕の清饌を供進するの清殿あり元め内宮の清饌と外宮より朝夕齋運いける聖武天皇神龜六年二月十日小浦田原は穢物ありとて道を通りて持ててついで天皇御は清惱ありま

夕は大神乃清饌あり乃中奏し即勅を遣さきて祈謝しをり給ひ其後室ありて今乃所は清饌殿を造るありとて内宮小齋饌を朝夕清殿におろし供進して内宮小齋運ふ事を停らま

△四十末社 本宮乃左に姑らして 風宮の右に終る

信間外宮四十末社内宮八十末社といふ事いほま乃時よりい傳へる甚難事なり外宮儀式帳は宮廻神總二百餘前と戒り

其の所を失ひし一也見たり乱世の比本宮
乃遷宮す百年餘絶つ事もあり言れ
舊記も兵火に滅び神事も飢渴に怠りて二
百餘年前の内乃遺まらざるを拾ひて後世の人
乃記すや成認て四十木社の名目とせらるる
凡諸事社乃地の方々にありて宮地より坐す
すらく今時宮の廻りに本社乃名を掲げ拜
所を定めらるる一遷拜所なり

△高宮一座 大官の前南
乃山上に在

伊吹戸主神

豊受大神乃荒魂神也一外宮第一乃別宮
にあり一内宮とあり別宮の皆菅草にて千木
本御門清垣あり古に金銅の清飭ありと瑞
垣もありと今に法鏡りも玉垣も
後ろ瑞垣一重なり又け山を捨尾といひ坂と
下部坂といひなり坂中に神輿石神摺るといふ
二箇の名るあり

△高宮御炊殿 高宮の 高宜の 前子左

高宮乃御饌を炊さす所の所なり

△内宮遙拜所 乃東より在

此所より内宮を遙拜しより次に別宮を

拜しより所の所なり

△土宮三座 土宮乃座を降 大土の方より在

大土御祖神

宇賀御魂神

大田命

外宮第一乃別宮乃御饌を炊さす所の所なり大治三年の度
會川堤守復のなる小宮號宣下ありしに
別宮乃御饌を炊さす所の所なり
金銅乃御饌ありしと今に絶えり月讀
宮風宮も亦相同し

△土宮御炊殿 土宮乃座 乃方より在

土宮乃御饌を炊さす所の所なり

△地護宮 土宮乃 北より在

地護宮といふ事古記に見えず御鎮座本紀

土宮三座を山田原入地護神と宣め祝祭と
けまそ地護の所神饌を崇め祠りて別よ小
祠を建まらるるへ兒官と和訓乃通へふに
よりて世俗小兒乃まきを祈まらるる甚しと傳り
なることや

△月讀宮遙拜所 土宮乃鳥居
を由るをま

外宮第三乃別宮にて清水本宮の宮庭より町
乃水の宮城入内は淨坐とわりけ所之月讀宮
を遙拜しまふの所なる假に拜殿と稱す

遙拜し又いけ拜殿にて神事を執りてま
まふ事もあり

△月讀宮清炊殿 遙拜所乃東
の方あり

月讀宮の所饌を炊くあり

△山神 月讀宮遙拜
所乃向ふに在

神拜次第記よ大山祇神なりと載しとて
乃時より祠まらるるや舊記のいふごと

△下御井 土宮山乃麓山
神社の傍に在

石井にて井戸を形する別宮乃所饌を炊くに

い水を因ふかりけり流の末に拜所と造りて
俗に流の水と云ふなり

△風宮二座 土宮乃東
の方より

級長津彦命

級長戸邊命

外宮第四乃別宮たり云々風はとりのを
弘安四年の神奇を現し大風を起し異賊
乃兵船を吹還し給ひに依り正應六年に
官號と宣下したまひて風宮と號したる也

△風宮御炊殿

風宮乃東
の方より在

風宮乃御饌を炊く所のなり

風宮のたれ方は岩戸へ参る乃道あり一町許
移りて坂あり其坂を登りて岩戸へ参るなり
岩戸より参るなりして此の内宮より参るなり
風宮乃を居をわき始め乃道を経て一鳥居
より参るなり一鳥居より内宮の一鳥居まで行
程五十町なり

△千枝杉

風宮乃東
の方より

大宮の千枝といふ人極らまゝしつゝのなるいと
つひ傳ふ家なり西本をまゝるゆゑ傳ふ西本
といふ正保元年に暴風乃る小顛倒し今一
本存まじり

新續古今集

勝定院大政大臣

世を守り神のまゝし今も伝ふ千枝の枝乃下陰
五百枝おのこも居乃外傳危の軒所此を小座し
とまり高宮に神本なりといひ傳ふ事古
記よ見まじりとも今も世より乃本なる事

失くぬや今いとも未なりとも

△高倉山 當宮の所 前の山と云

外宮神山の惣名なり高倉山と云高佐山と
日鷲山と云いより元長百首註より加利佐我
峯左貴山雞不鷲山音無山郭公不爲聲山
ともいふやいつり古記よ高佐山よ十二箇の岩
室ありと云大己貴命と天日別命とも居所
なりと見えまじりとも今も三所乃岩室
ありの地

△岩戸

高倉山乃巔あり岩戸あり

岩戸とい神代乃むろ天正ありて素戔嗚尊を
つごあらとさるるを天照大神いり後して
岩隠き一たまひ岩窟乃名ありとるるに
いつまの時やありまふ當宮なる山巔に
岩窟を殺しまはりて天正乃岩戸と名一撰
てそのまじしけ岩戸のありを後を見らふ巨
石を疊みあましく窟宅とて事人力乃独い
つとあよあつと神代天皇の御宇に

ぬらりぬ氣大に發つるは天日別命に勅
して大己貴神乃許し遣し復命申して後
を發して東の洲を征さしめたまひ道は伊勢
國を天日別命に授ちたまひて長く邑國と
なる一む時は於火氣又堪とて伊勢高佐巔に
石宅を造ると風土記に見えける一説は春日
戸高座神伊勢津彦等乃石窟より豊受大神
度會山田原に御鎮座の後神勅より高座を
恐きて春日戸神の何内國高安郡に伊勢津

彦ハ信濃國よのつま信よといひ

△高天原 若戸乃 後よま

岩乃前江一諸神達乃うまて信ひといひを
今の世ハ神樂といひて撫て是を執行ふ而を
神樂殿といふ其方々をふかひて若戸の神樂
殿といふ形を諸神達乃集て給ふ所さかして
信よまの天原といひり

△茶屋 若戸乃

山田原乃人家を山下に見おろしたるが宮

川の原を見ととより小よ向ふて神樂の海と
見ととて、春河尾張乃遠峯を眺み秋を乃
はわひをこれ氣ととぬきて富士のふたふ
とらふとつりに見ととまといふとてあまの
て神秀を鍾りてみ所なり是なりゆめい
とて坂を四町下れをた乃方よ岐路ありて終
を經て高神客神社の春り思およ出る也

△客神社一座 高神山 在

建御名方命

建御

命

信濃國諏訪明神と同神と云くは、まにたりの
西の方の宮神社東の方の高神社なり

△高神社一座 高神山

建日丹方命

坂を下て豊本に入なり坂を下右の岐路より宮
崎に出るなり

△豊宮崎 豊宮の東

豊宮の北と云く豊宮神の北の尾崎より入る
かくならるるなり又錦河内と云く錦河内

宮崎乃大海原と云く大なり山く川流り

向ふ田圃細流の相交りたるありて風
によりてかく掃くたるなり前め鼓岳山麓へ

まゝく相擁と云りて東に神道山西は鷲靈
山ありて挽と抱きつるなり田上大水社山末

社宮崎氏社といふ所社其より水所坐なり井台
山宮谷車塚提森と云く山崎も亦と向ふあり

又清常供田と云く大社の清饌も供へまゝ稲穂
を飯る乃清田所も亦其よりあり所田植の苑

形ありて果は田長入後人舞諺と鼓
送らしてゆくもまじき諺といふなり

△宮崎文庫 豊宮崎の至高
神山の麓あり

慶安元年の菅建あり祠官學問乃為る庫藏

あり廟を構へて講習討論を以ての學舎

す凡朝家の所記録を官乃神書舊記より歌

書儒書醫書雜との書ふらして聚めて是を

藏む法をり寄附せらるる乃書ありて漸く

棟より充て寛文元年の公儀より修理

武指解乃来地を所寄附あり東乃處
乃社あり

△度會大國玉比賣社二座 高神山の東
乃屋崎に在

大國王命

佐佐良比賣命

外宮攝社十六座乃内あり此所を俗に大黒谷

といふ大國乃字を喜ぶといひ乃張といふなり

傳へて終る大國谷と書ふ筆をりもあらず

りや美ふも堪えり

△伊加理社一座 大國玉姫社 乃南あり

伊加理比女を祀まつる也

儀式帳に載る名社八所なり也

△岡本 高神山を下て 考入る町あり

昔も思申の里とてそと家居まらうにありし
も今の人家棟をばるて繁昌る町とまら
櫛工多しとて名物とす

新名所新合

荒本回成忠

思申乃里の外にわらうまらふとて山あり

△小田橋 岡本と妙見町との堺あり

此る乃川を流す川とて其流を遠く川崎舟
江を經て高城濱清渚へ流るる間乃川筋を
勢田川といふなり

△妙見町 小田橋乃東の町也

妙見山乃麓乃町とてゆふかくなむらさき

△岡崎宮 妙見町の左乃方乃山よま

妙見星童の本像を瓦堂乃内安置せりゆふ
俗に妙見堂といふなり貞觀元年に外宮大内

人高主の女大物忌子沖誓川に下りて溺まり
を尋ね求むればとて跡を尋ねて妙見星
童形乃像を擲つて得たりと此所は安置
妙見と崇め祠あり

△尾部坂 妙見町乃本
の坂をいふ

俗よる乃山といふまゝの洞乃坂なりとわく
つらなるをいふ又い坂を尾部坂尾上坂とも
いひけり乃といふを尾部と強ひ隱岡といふ
つらなる昔倭姫命退くこたへり

中よりいへばなるは強山隱岡とてつらなる
小祠を建て尾上社と祝ひ祠ありと事
古記より見えてしりとも其名所詳くなくとも
坂を登りて五町許乃奥は常明寺といふ天台
宗乃寺なり其寺の門内たのまゝ鳥居岩窟
あり是即倭姫命石隱きまゝ所也
といひ傳ふまゝとてたゞうぬ徴しるをや

可葉集

當麻真人妻

我女いつし地ならんかまのうらなれと今も然らん

△クニノミヤ神落堂社 常明寺の境内寺堂の西にあり

神名詳々正ノ月八日十二月十日ノ神事あり

伊勢系之按内記卷上

